

青森の暮らし

グラフ青森
411号

本体 571円+税



木の八ナシ

田中林業

森のめぐみ展

わいどの木

BUNACO

木材木品製作所

わにもっこ

フォレストワーカーズ

木の駅しんごう

BUNACO



小さな村から世界へと広がるブナコ テーマは音と光の空間創造

西目屋村を広く認知させたい

「うちの村で廃校になる小学校があるのですが、その校舎で工場をやりませんか？」と西目屋村の関和典村長から、一緒に食事をしていた時にそう提案されたのは4年前のこと。ブナコ(株)の倉田昌直社長(63)がちょうど大型のカッティングマシンの導入を考えていた頃で、弘前市の本社は狭く設置するには難しいため、空き校舎を探していた時だった。

さっそく倉田社長はその校舎を下見しに行ったところ、ひと目で気に入ってしまった。鉄筋の建物であるということもそうだが、何よりも周辺が山々で、春には新緑、秋には紅葉が目の前に広がるというロケーションの素晴らしさに心打たれたという。

西目屋村は青森県で一番小さな村だが、世界遺産白神山地の入口の村である。しかもブナ天然林が世界最大級の規模で分布しているのだ。それはブナコにとって、格好の場所になる。

二つ返事でその話を受けた倉田社長。間もなく関村長は公民館に村議員や村民を集め、ブナコの工場について説明会が開かれた。席上倉田社長は、この工場が海外向けの大きな照明器具を作りたいことなどを説明。のちに、村議会の議員一行がフランスへ研修旅行へ行った時、フ

手工芸品ではなく手工業のブナコ

倉田社長が父の会社の跡を継いだのは1980(昭和55)年で、26歳の時だった。県内企業初のグッドデザイン賞を受賞するなどしてきたが、バブル経済崩壊後の1996(平成8)年以降、業績は急激に低迷していった。

それまで食器などのテーブル回りが主力製品だったが、ある時、東京のインテリアショップからオリジナルの照明器具をつくって欲しいとの依頼があり、これが大きな転機となったのである。

2003(平成15)年にデザイナーの武松幸治さんと組み、ブナコランプの第一作に続き、「BUNACO RED」シリーズを発表。これを境にインテリア部門にも進出。さらに2014(平成26)年から毎年「パリ・メゾン・エ・オブジェ」に出展するなど、国内外の展示会に参加するようになった。こうしてブナコ照明は国内では有名ホテルでも採用になり、パリでも知られるようになっていったのである。

そして、3年前からフランス企業と提携して現地での製品づくりを開始。翌年にフランス人のインテリアデザイナーと新たな照明器具の共同開発に取り組むようになり、本格的にヨーロッパ市場参入へ向けて発進した。そんな折に関村長と倉田社長の思いが合致したのである。

「これまでの私の口癖は『出来ないことは



フランス北西部のノルマンディーにあるブナコ委託工場へも立ち寄り、倉田社長の説明に納得したといういきさつもあった。「地元の子供たちに青森県のモノづくりのすばらしさを知って誇りを持って欲しい。若者たちの雇用の場が増える環境づくりをしたい。西目屋村を広く認知させたい」という関村長の熱い思いを受け、教室の壁をガラス張りにし、各部屋の扉も大きな台車が入り込めるようにするなどし、ブナコ西目屋工場が完成したのは、今年4月25日のことだった。また、校舎だったとは思えないブナコ照明の明かりに包まれたお洒落な「BUNACO CAFÉ(ブナコカフェ)」もオープンした。





ブナコ株式会社
西目屋村田代稲元 196
TEL/0172-88-6730

「地元の子供たちに、『村にはブナコがある』と胸を張って言ってもらえるような工場になるよう頑張りたいですね。それが私たちの原動力にもなります。また、工場やカフェに訪れた観光客がSNSでアップしてくれ、それでもたお客さんが来てくれたら嬉しいし、村に貢献できたかなと思うんです」と倉田社長は笑顔で話す。

外はすっかり日が暮れ、赤みを帯びたブナコ照明の柔らかな明かりがカフェ店内を浮かび上がらせていた。

ない』でした。それが新たな技術を生みながら進化を続けてきたのです。ブナコは県の伝統工芸品にもなっていますが、手工芸ではなく手工業だと思っています」と倉田社長は言う。

ヨーロッパの生活様式に合ったデザイン

ブナは欧米で『森の聖母』と呼ばれる木質の美しい木だという。そのブナで作られたブナコ照明は、ヨーロッパの人に受け入れられている。その理由のひとつに、生活様式に偶然合ったことがあげられると倉田社長は話す。

「デザインが北欧的で、日本製だと分かる」とビックリするんですよ。特にフランス人は北欧の製品が大好きなんです。北欧のものがパリやロンドンで認知されて世界へ流れていく」

ノルマンディーに組み立て工場を設けたのは、ヨーロッパの安全基準マークCEの取得が容易になるからだ。製品を輸出してもCEマークがなければ公共施設での使用は難しいのだ。日本からパーツを送って現地で組み立てて完成品にするため、倉庫へ保管するにもコストがかからず、注文が入ればヨーロッパやロシアなどへ工場から直接送ってくれる。そのため、価格を抑えられ、海外の市場に参入するハードルが低くなるのだという。

もうひとつ、ブナコ照明の他にブナコスピーカーも同社でつくっている。もと

もとオーディオ用のものだったが、ライフスタイルが変わり今では市場が小さくなったため、リビングで気軽に聞けるスピーカーを開発する計画だ。ブナコスピーカーは澄んだ温かな音質なのだが、リビングに置くだけで雰囲気が変わるような美しいデザインをと、世界的に有名なデザイナーである佐藤オオキ氏とコラボすることになった。

「佐藤さんがデザインしたスピーカーを世界各国へ売りたいと話したら、『え！ブナコさんのデザインさせてくれるの！ぜひやりたい』と喜んでくれました。この西目屋村まで来ていただき、工場だけでなく自然環境も見て欲しい」

観光産業のもうひとつのあり方

音楽と明かりは人に癒やしを与える。仕事で疲れて家に帰ってきた時、ホッと気持ちと和む明かりがあれば、それだけでも豊かな気分になれる。

「日本人ほどあくせく働いている民族はないと思いますが、居心地のいい空間を創ろうとしないし、自分のライフスタイルを楽しもうとしないですね。照明もやたら明るく、室内に陰影がありません。疲れる明かりなんです。でも、ヨーロッパには癒やされる明かりのなかで音楽を楽しむという文化があります」

倉田社長は「光と音の空間創造」をテーマに、ブナコ照明とスピーカーを世界へ

広めていきたいのだという。その拠点工場となるのが西目屋村なのだ。

各作業がガラス越しで見学できるブナコ西目屋工場では、最大40名程度までブナコ製作体験もできる。白神山地入口で、さらに津軽ダムの津軽白神湖で水陸両用バスもある。その一連の観光コースにブナコも加わった。観光客を常時誘客できる工場は青森県内ではここだけということもあって、旅行パックに組み込んでいる旅行会社もある。